

研究論文

命題相対化の表現形式と意味機能

—— Contrary to を指標としたアプローチ ——

大橋 哲

- 目次
1. 一般認識作用としての命題相対化
 2. 命題相対化モデル
 3. 命題相対化の実例
 4. 研究目的
 5. 研究方法：contrary に注目して
 6. 指標：on the contrary
 7. 指標：contrary to W_i
 8. 意味機能
 9. 意味機能特定の問題点
 10. 対立世界と意味機能の関係
 11. 世界特定要素の抽出

1. 一般的認識作用としての命題相対化

人間は、自らの置かれた環境を認識し、それに働きかけることによって自分の適合できるように環境を整えていく。あまりに単純過ぎるようではあるが、このように一般的に説明される人間の能力が、特に言語使用において発現する一つの形式として、「命題相対化」と呼ぶ認識作用を仮定したい。認識作用といっても、それは、実際に生成された文章の構造の分析に基づいて提示する情報処理的モデルである。したがって、認知科学的な意味での実証性を主張するものではない。それにしても、命題相対化という認識作用は、本稿で示すように文章の構造に深く関与するのみならず、発話行為などの言語活動や、我々が言語に頼って行う問題解決行動などの知的活動全般にも広く関与していることが推察される。そこで、本稿の本題である、命題相対化がいかに関与しているかという問題について具体的な議論を

始める前に、まずそれが、より一般的な言語活動や知的活動とどのように関係するのかという点から論じたい。

人間がある環境を認識するということは、その環境を以前から自分が経験的に知っている環境と比較する作業を含むであろうということは、想像に難くない。そして、その環境が比較の結果、以前から知っている環境と同種のものであると判断されれば、既存の経験知識は強化されて、その普遍性が増すことになるであろう。対象とする環境が、経験的知識に基づく環境と整合し、それに統合されるのである。一方、対象となる環境が、既存の経験知識で説明されるものとは整合しないと判断された場合には、それを既存の経験知識との関係においてどう処理するかという問題が生じる。ある時には、その環境は新種の経験知識を生み、既存の知識と対等に位置づけられるかもしれない。またある時には、その環境に対してある種の価値判断がなされ、例えば、論理的整合性の高い環境であると判断されるようならば、既存の経験知識を訂正する必要性が生まれてくる場合も有るであろう。逆に、その環境の論理性が疑われ、既存の経験知識に照らして訂正される場合も有り得る。更には、既存の知識に基づく環境とそれに反する環境を統合すべく、第三の環境が探索されるかも知れない。本稿で述べる命題相対化とは、このような、環境、或いはそのなかで有効な論理の比較に関わる一般的認識作用を言語使用との関係においてモデル化するものである。

人間の言語活動は、様々な関係で存在する二つの環境を統合することを目的として成される場合が多い。例えば、依頼という発話行為は、現実にはまだ存在していない出来事を、話者が理想的な環境の中に想起して、その現実と理想の対立を解消することを目的に行う行為であると考えることができる。話者が、現在は聞き手の援助をまだ受けていない時、或いはこのままでは援助してもらえない可能性が低いという現実を認識した時に、援助を受けるという理想的な環境を想起して、依頼という発話行為を行うような場合である。また、依頼に対して遂行される許諾という発話行為は、依頼者の理想とする環境に、話者が自分の計画を合致させる意思を示す目的で行われる行為であると考えられる。それに対して、拒絶という発話行為は、依頼者の理想とする環境に、自分の計画を合致させないことの意味表示である。ここでいう、現実と理想、理想と計画といったような環境の比較作業は、この意味において、発話行為の誘発刺激のようなものである。

ところで、比較される二つの環境が対立的な関係として認識される場合、例えば、現実と理想が食い違っているような場合に、その対立を解消すべく行われる行為は、一般的に我々が問題解決行動と呼ぶものに他ならない。即ち、多くの発話行為は、一種の問題解決行動と考えることもできる。そして、解決すべき問題の発見には、

環境の比較作業が含まれている訳である。そのみならず、発話行為を一種の問題解決行為と見なす時、その行為の有効性の認識にも、やはり環境の比較作業が関与する。即ち、発話行為の後に生じる新しい環境の中で、発話行為以前に存在した理想と現実の齟齬が解消しているか否か、更に、発話行為以前の現実とそれ以後の現実が対立的な関係を持つに至ったか否かといった環境の比較作業である。依頼以前の現実では援助を受けることができなかつたのに対して、それ以後の現実では、援助を受けていることを認識した場合に、つまり、依頼以後には現実と理想の対立が解消していることを認識した場合に、その依頼行為は有効な問題解決行動であったと評価されるであろう。

このように考えた時、その依頼者は自分の置かれた環境を認識して（上例でいえば、現実と理想の比較作業により問題を発見し）、それに働きかけることによって（依頼という発話行為を解決策として実行し）、自分の適合できるようにその環境を整えた（現実と理想の対立を解消した）のだといえよう。人間は、絶えず問題解決行動を行って環境に適応していくとするならば、その行動の基本を成すと考えられる環境の比較作業の仕組みを具体的に示すことは重要である。本稿では、言語使用のなかでも、文章という特殊な一面に関与する環境の比較作業を観察することにより、そのモデル化を計る。そうして、その比較作業がいかん文章の中で多様な現われ方をするかという点を、実際の文章構造を分析することで示したい。

2. 命題相対化モデル

命題相対化とは、命題の真理値がその主張される環境（又は、世界）に相対的に決定されるという考えに基づいている。ある世界で真である命題が、別の世界では偽であることもあり得るという考え方である。命題は、主部と述部からなり、一般的には「～は、～である」又は、「～は、～する」という形式であらわされる。しかし、それが主張される世界については中立的な、抽象的情報単位とされる。どの世界についてのことなのか特定されないため、それのみでは真理値を持たない。命題の真理値は、それを主張する世界が特定されて始めて判断が可能となる。命題を主張する世界は、命題が実際の文として用いられた時に特定される。命題と世界の関係は、代名詞などのダイクシス表現とそれが用いられている具体的文脈の関係と並行的である。代名詞の指示対象が、その代名詞の用いられる具体的な文脈の中で始めて特定できるのと同様、命題の真理値は、具体的な世界の中で主張されて始めて特定できるのである。

世界、命題、真理値の関係を以上のように考えると、多くの文は、ある命題 p が、ある世界 W_i において真（或いは、偽）であることを述べているのだといえる。そ

これは、文を次に示すような三つの要素を持つ意味構造として捉えることである。

文の意味構造

In World w_1 ,	it is (not) true	that p
(世界特定要素)	(主張要素)	(命題要素)

例えば、Tom is in Exeter now. という文は、[Tom be in Exeter now]とでも表されるような、それが実際に文として用いられる状況とは中立的な命題pを含んでいる。この文が、実際にある話者によって発話された場合に、その発話の時点で特定される世界 W_1 において、この命題pは真であることが、主張されている。この場合の世界 W_1 は、文中のbe-動詞isの時制によって特定される。

また、Mary believes that Tom is in Exeter now. のような文に関しては、同一の命題pが、「Maryの信念」という世界において真であることを主張しているものと見なすことができる。より厳密には、「文が発話された時点において、Maryがその時点について持っている信念」とでも表すべきかもしれない。しかし、この種の厳密さは、本稿においてはあまり意味を持たない。なぜなら、文章中で命題相対化を問題にする時は、文のどの情報を命題とみなして世界特定要素と切り離すかという問題は、その文だけでは決定できないものだからである。例えば、この文の次にBut Ken doesn't believe so. という文が続いている場合には、命題pを単に[Tom is in Exeter now] と考え、その真理値が「Maryの信念 (W_1)」と「Kenの信念 (W_2)」に相対的に決定すると考えれば十分である。一方、Yesterday, Tom was not in Exeter. He is there now. という二つの文の間で命題相対化を問題にするならば、相対化される命題は、[Tom be in Exeter]であり、二つの世界はそれぞれ、 W_1 (Yesterday-was) と W_2 (is-now) という世界特定要素で示されるものと考えることができる。つまり、二つの文の間、または節の間で、繰り返されている主部・述部からなる情報を命題とみなし、それ以外の情報は、それを相対化する世界特定要素と考える。

命題相対化には、主に二種類の形式が考えられる。その一つは、ある命題の真理値を、二つの世界 W_1 と W_2 について比較した場合に、その両方の世界において命題の真理値が同一のものである。この形式は、例えば、Mary believes that Tom is in Exeter now. Ken believes so, too. というような文の間にみられる。つまり、 W_1 (Mary believes)と W_2 (Ken believes)という二つの世界の両方において、[Tom is in Exeter now]という命題が真であることが主張されている。このように、二つの世界で真理値が同一な場合の比較作業を、相似的命題相対化と呼び、以下のように

図示する。

相似的命題相対化

W_1	T	(In W_1 , p is true / it is true that p)
	p	
W_2	T	(In W_2 , p is true / it is true that p)

なお、相対化という言葉は、真理値の違いを前提とするものとして理解し勝ちであるが、真理値が同一の場合でも、異なる世界を比較することによって、命題の真理値の相対性を問題にしていることには代わりがない。

命題相対化のもう一つの形式は、比較する二つの世界で、命題の真理値が異なる場合である。この形式は、例えば、前述の Mary believes that Tom is in Exeter now. But Ken doesn't believe so. という文の間にみとめられる。この形式を、背反的命題相対化と呼び、以下のように図示する¹⁾。

背反的命題相対化

W_1	T	① (In W_1 , p is true / it is true that p)
	p	
W_2	F	② (In W_2 , p isn't true / it isn't true that p)

背反的命題相対化の重要な特徴は、多くの場合、別の比較作業を誘発する点である。上図①は、「世界 W_1 において、命題 p は真である」という判断がなされていることを意味しており、それが表現された文は、究極的には In W_1 p is true. という意味構造に還元できる。前掲の例ならば、第一文を In Mary's belief (W_1) it is true that Tom is in Exeter now(p). と書き換えて考えることができる。一方、上図②は、In W_2 , p isn't true. という意味構造に還元できる文として表現される。しかし、この意味構造は、「世界 W_2 においては、命題 p は真ではない」という意味であり、命題 p と世界 W_2 の関係を否定するものの、 W_2 で真となる命題が何かは分からない。この点で、情報としては曖昧であり、 W_2 で真である命題を特定することが必要となる。そのため②の意味構造は、以下の図に示すような比較作業を誘発する。

	p	F	②'	(In W_2 , p isn't true / it isn't true that p)
W_2	not p	T	③	(In W_2 , not p is true / it's true that not p)

③は、「世界 W_2 においては、命題 not pが真である」という意味構造であり、②/②'の意味を特定する。この比較作業は、世界 W_2 において、二つの命題pとnot pを比較した時に、前者は偽、後者は真と判断されたことを示しており、①-②とは別種の比較である。①-②の比較が、二つの世界を共通の命題の真理値について比較するものであったのに対して、②'-③の比較は、共通の世界における二つの命題をそれぞれの真理値について比較するものである。

③の意味構造が表現される場合は、必ずしもその文の命題要素に否定辞notが含まれるとは限らない。命題pに対してnot pと表すことのできる命題はいろいろである。例えば、Mary believes that Tom loves Exeter. Ken believes that he hates it.という繋がり文では、[Tom loves Exeter]という命題をpと表すならば、[Tom hates Exeter]という命題はnot pと表すことができよう。この二つの命題の関係は、究極的にはlovesとhatesの間にある反対関係に帰する。[Tom hates Exeter]は、not pに直接対応すると考えられる[Tom doesn't love Exeter]という否定形の命題よりも、意味的により特定されている。本稿では、このように特定された命題を、pの否定形として自動的に得られる命題not pと区別するために、NOT pという記号で表すことにする。意味的に強化されていても、NOT pは、not pの一種なのであるから、意味構造③を表現する文の命題要素と見なす。

命題not pの意味的な特定は、論理的に正反対の命題を提示する他に、置換によって成される場合もある。例えば、Mary believes that Tom is in Exeter now. Ken believes that he is in London now.という文の関係は、ExeterとLondonの置換に集約される。この場合も、[Tom is in London now]は、命題pの否定形であるnot p[Tom isn't in Exeter now]が意味的に特殊化したものとみなすことが可能であり、やはりNOT pと表せる。

以下に、上記二種類の比較からなる命題相対化を、その意味構造と共に図示する。

図1 命題相対化モデル

世界特定要素	命題要素	主張要素		対応する文の意味構造
W_1		T	①	In W_1 it is true that p
	p			
W_2		F	②	In W_2 it isn't true that p
	p	F	②'	
W_2		T	③	In W_2 it is true that not p / NOT p
	not p			

3. 命題相対化の実例

前節でモデル化したような認識作用の関与が認められる実際の文章を収集し分析することにより、命題相対化が我々の知的活動にどういった機能を果たしているかを知るための、具体的な手がかりを得ることができる。本稿では、図1で示した二種類の比較作業からなる命題相対化が関与していると考えられる文章を分析することにより、その目的を果たしたい。従って、相似的命題相対化については、ここでは触れない。

以下に示す文章は、背反的命題相対化が関与している文章の一例である。各文には、便宜上番号をつけてある。

例文1

Dear Sir

(1)In an advertisement in The Independent (22 February) the Friends of the Earth creates a misleading impression about British banks' involvement with projects in the Amazon, which we must correct.

(2)The advertisement suggests that a proposed hydro-electric scheme which will flood the Amazonian rainforest will be financed by the World Bank and British high street banks.

(3)This is not the case. (4)While the World Bank and more than 200 commercial banks – including British banks – are considering the provision of a power sector loan to Brazil, the World Bank has made it clear that it has not financed and does not intend to finance hydro-electric projects in the Amazon.

(5)The co-financing by British and other commercial banks is governed by the same condition.

(6)Contrary to the impression given in the advertisement, we share in the desire to save Brazilian rain forests, and would point out that two of the three primary conditions attached to the power sector loan are aimed at protecting both the environment and the local Indian population.

この文章の(2)(3)(4)には、命題相対化が文章の一部として具現化した典型的な例を見ることができる。典型的という意味は、モデルで示した①-③の意味構造がそれぞれ独立した文として表現されているという点においてである。意味構造①-③の各要素と文中の情報の対応を簡略化して以下に示す。

図 2

W ₁ (The advertisement suggests)	T ①
p(a proposed hydro-electric scheme will be financed by the World bank)	
W ₂ (is)	F ②
p(a proposed hydro-electric scheme will be financed by the World bank)	F ②'
W ₂ (the World Bank has made it clear)	
not p(it does not intend to finance hydro-electric projects in Amazon)	T ③

図1に示した命題相対化を構成するそれぞれの意味構造が、①は(2)、②/②'は(3)、③は(4)として文章中に表現されたと考える。(3) *This is not the case.*では、be-動詞 *is* の時制だけが、世界特定要素とみなし得る。この文は、文章の書き手が命題 *p* を偽と判断した事を述べているが、be-動詞 *is* は、書き手の認識において現在時制が規定する世界を特定している。又その世界は、(4)に明示された世界特定要素 *the World Bank has made it clear* が特定する世界とは、論理的整合性のある世界とみなし得る。それ故、ここではどちらも W₂ と図示してある。

4. 研究目的

命題相対化が関与している例文1のような文章を収集し、分析することにより、いくつかの興味深い点が明らかになると考えられる。第一に、命題相対化の表現形式を明らかにすることができる。①-③の意味構造は、実際に文章の中でどのように表現されるのだろうか。いつも、例文1の場合のように、①-③がそれぞれ独立した文として表現されるわけではなかろう。文脈的要因により、表現形式が異なるのではないか。また、収集された文章の中から頻出する表現を抽出すれば、命題相対化の関与を標示する言語シグナルを特定できる。例えば、例文1の *This is not the case / correct / contrary* などは、いずれもそのような表現である。このようなシグナルの特定は、言語教育の分野にも資するとことが大きいと期待される。

第二に、命題相対化がいかなる意味機能を果たすのかという点である。そもそも、何の目的で命題相対化は文中に表現されるのか。例文1の場合であれば、命題相対化を表現している(2)(3)(4)全体としての意味機能は、「誤りの訂正(*mistake-correction*)」である。これは、(1)の *we must correct* という表現により明示されている。このような命題相対化の意味機能を特定することにより、命題相対化がどのような認識活動に関与するのかを具体的に示すことができるであろう。

第三に、上記事項と深く関わるが、命題相対化のそれぞれの意味機能と、対比さ

れる二つの世界にはどのような関連が見られるかという点がある。ある意味機能が成立している場合、対比される世界 W_1 と W_2 の間にはどのような個有の関係が見られるであろうか。例えば、例文 1 (2)-(4) で対比されている世界 W_1 と W_2 の関係は、二つの対立的な情報源の関係とみなすことができる。そして、 W_2 は文章の書き手の立場とも整合するものである。

5. 研究方法：contrary に注目して

研究の方法としては、恣意的に命題相対化が表現されていると考えられる文章を多数集め、その表現形式や意味機能を特定していくことも考えられる。しかし、それは先の見えない作業に陥る可能性が高い。むしろ、意味的な特徴故にその言語シグナルであることが明らかであるような表現に注目し、それを含む文章を収集して、その中で命題相対化の表現形式や意味機能を特定することから始める方が、より効率的であると考えられる。そして、それを基準にして、新たな表現形式や意味機能を記述していけば良い。

意味的特徴により命題相対化を標示すると考えられる言語シグナルの一つとして、contrary という語がある。この語の意味は、論理用語で言えば「反対対当」であり、一般的には、この語が文中に有れば、反対対当の関係にある命題の存在が予測できる。命題相対化モデルの意味構造②に対応する文が、情報量の点で不十分であり、更なる意味の特定が必要となることを述べた。その特定方法の一つは、[Tom loves Exeter] という命題に対して、[Tom hates Exeter] という命題を示す、反対対当の情報の提示によるといえるものであった。従って、contrary という語を含む文章には、図 1 の意味構造①②として示した背反的命題相対化を前提として、②③による意味の特定をも含む一連の認識作用が、直接的に関与していることが予想される。

ところで、以下に示すように、例文 1 の(6)にも、contrary という語が含まれていた。

(6) Contrary to the impression given in the advertisement, we share in the desire to save Brazilian rain forests, ...

この文は、*the impression given in the advertisement* を W_1 、*share* の時制が規定する世界を W_2 とみなすと、一文の中に命題相対化を具現化しているものとも理解できる。まず、命題[we share in the desire to save Brazilian rain forests] を NOT p と表すと、それと反対対当の命題 p が、 W_1 (*the impression given in the*

advertisement) では主張されていることになる。この文だけでは、その命題 p を、NOT p の否定形以上に特定することはできない。しかし、先行文(2)には、*The advertisement suggests* という、 W_1 を示すもうひとつの世界特定要素が既に明示されており、そこでは命題 [a proposed hydro-electric scheme which will flood the Amazonian forest will be financed by the World Bank] が主張されている。そこで、最終的にはこの命題が、NOT p と反対対当の関係にある命題 p であると捉えられるのである。この例からも、contrary という語、或いは今の場合なら contrary to W_1 という表現を、命題相対化が関与していることを示す指標と見なすことは、妥当であると言える。それを含む文章からは、命題相対化の各要素を取り出すことができるからである。

結局、例文 1 には背反的比較に基づく命題相対化が二組含まれていることになる。今述べた contrary という指標を含むものと、図 2 で示したものとである。両方とも、命題 p の役割をするのは(2)の that 節の内容であり、それぞれがその異なる二つの局面に対して、つまり経済的援助と森林破壊に対して、NOT p に当たる情報を提示しているのである。また、どちらの場合も、命題相対化が全体として果たしている意味機能は、誤りの訂正(mistake-correction)である。そして、対比されている二つの世界は、いずれの場合も二つの情報源、即ち the advertisement と the World Bank とみなすことができる。ただ、この二組の命題相対化が文章化する際に用いられた表現形式は、異なっている。この点を明らかにするために、まず、最初の命題相対化が文章化したものを次のように表してみる。

(A) In W_1 it is true that p . In W_2 this is not the case. In W_2 it is true that NOT p .

これに対して、contrary を含む方は、次のように表せる。

(B) In W_1 it is true that p . Contrary to W_1 , in W_2 it is true that NOT p .

(A)と(B)の間に見られる形式の違いは、(A)の方が、意味構造①②③をそれぞれ独立した三つの文として表現しているのに対し、(B)の方では、②に対応する直接的表現は、独立文としては現れていない点である。その代わりに、Contrary to W_1 という句が、意味構造③に対応する文の一部として組み込まれている。

この形式の違いは、文脈的要因によるものと考えられる。(B)では In W_1 it is true that p . に対応する(2)のあとに(3)-(5)が続いているために、(A)のように②を This is not the case. というように表現することはできない。(6)が、距離的に離れてはいる

が、In W_2 it is true that NOT p に対応する情報であり、(2)と結束性を持つ文であることを明示するためには、Contrary to W_1 という表現を用いることによって、(2)で既に表現されていた世界 W_1 を繰り返し明示することが必要なのである。Contrary to W_1 という表現は、それを含む文と、意味構造①に対応する文との間にかなり距離がある場合でも、結束性を持たせ、命題相対化が関与していることを示すことができる。そのみならず、仮に意味構造①が独立文として表現されていなくても、命題相対化を表現できるのである。それに対して、This is not the case.という表現は、①に対応する文の直後にこななければならない。また、この様に②を独立文として表現するということは、命題 p を否定することに一文を割いている訳であり、そうでない場合に比して、否定の意味を強調しているといえる。

この様に、命題相対化の意味構造①②③は、独自の文脈的特性を持つ多様な表現形式で実現されると考えられる。すると、contraryという語を指標として命題相対化の表現形式を探ることが、どの程度命題相対化の表現形式の全体像を明らかにしてくれるかは不明である。また、例文1の二つの命題相対化は、どちらも誤りの訂正という同一の意味機能を持つとみなすことができたが、contraryという語を指標としてデータを制限することで見過ごされてしまう意味機能も多いであろう。そのような難点を銘記した上で、本稿では敢えて指標を限定して、命題相対化の表現形式や意味機能を探ってみる。

多少なりとも前述の不安を払拭してくれる事実として、例文1の第一組めの命題相対化を表現している(A)にも、以下のような形式で、contraryという語を指標として組み込むことができる。

(A)' In W_1 it is true that p . In W_2 this is not the case.
On the contrary, in W_2 it is true that NOT p .

実際、例文1の(2)-(4)で、命題相対化が関与する部分を、文意を保ったままこの形式に書き直して表現することも可能である。

(2) The advertisement suggests that a proposed hydro-electric scheme which will flood the Amazonian rainforest will be financed by the World Bank and British high street banks.

(3) This is not the case. (4)' On the contrary, the World Bank has made it clear that it has not financed and does not intend to finance hydro-electric projects in the Amazon, while the World Bank and more than 200 commercial

banks – including British banks – are considering the provision of a power sector loan to Brazil.

(A)は、(A)'に含まれる on the contrary という指標がついておらず、(3)の意味を特定する(4)が反対対当の情報であるということが、明示されていないだけなのである。このように contrary という語を補って考えることが可能であるという事実は、やはり、contrary という語を一つの指標とみなして、それを含む文章の構造を分析することが、命題相対化の表現形式一般に対して、ある種の基準を示してくれる可能性が高いことを意味する。

6. 指標： on the contrary

contrary という語を命題相対化の指標とみなして、それを含む文章の特徴を探るために、英字新聞 Independent & Independent on Sundays on CD-ROM をデータとして、1988年10月1日～1989年3月31日までの間の contrary という語を含む記事を分析してみた。この間に contrary という語を含む記事は 3 2 2 件あり、それを文法的な特徴により以下のように分類した。

- 1) contrary to W_1 (115件)
- 2) on the contrary (84件)
- 3) be contrary to W_1 (50件)
- 4) W_1 to the contrary (29件)
- 5) contrary + Noun (14件)
- 6) その他 (各10件未満)

筆者は、拙論(1999)において、前記データの中で接続副詞 on the contrary の用いられた文章を分析して、命題相対化の表現形式を記述した。文章中にこの接続副詞が用いられていれば、少なくとも二つの節が命題相対化の表現に関与することが一般的である。それ故、最多件数の contrary to W_1 を指標として集めた文章におけるよりも、命題相対化を表現する部分が文章全体に占める割合が高く、文章構成に大きな役割を果たしている場合が多い。例えば、新聞記事の報道内容を、読者の側から訂正する意図で書かれた編集者宛ての手紙などは、その報道内容とそれを置き換える訂正情報の提示が文章の中心であり、命題相対化の表現が文章構造のほぼ全体を占めていた。

命題相対化が全体として情報の訂正を行う目的で表現されたというような場合

に、その目的を命題相対化の意味機能と考えた。一般的に、on the contraryを指標として集めた文の中では、意味機能を一種の節関係として説明することができた。節関係とは、二つの文の間、或いは節の間に結ばれる意味関係のことである。例えば「否定(Comparative Denial)」という節関係ならば、一方の節を他方が否定する場合に成立し、また「特殊化(Specification)」という節関係ならば、一方が他方の意味を特殊化している場合に成立する。そして、命題相対化の意味構造①-③が、全て独立した三つの節として表現されれば、①と②を表現する節の間には「否定」の関係が成立し、②と③を表現する節の間には「特殊化」の関係が成立する。更に①-③全体としては、「否定」と「特殊化」という二つの節関係が統合して、「誤り-訂正(mistake - correction)」というようなより高次元の節関係が結ばれ、これを命題相対化の意味機能と考えた。接続副詞on the contraryに関するデータの中で頻出した意味機能は、「誤り-訂正(mistake - correction)」の他、「予測-挫折(expectation - frustration)」と名づけたものであった。そのうちの「予測-挫折」の意味機能は、「問題(problem)」と理解され、更に「解決(solution)」にあたる情報を要求することも論じた。また、「誤り-訂正」と「予測-挫折」の違いは、①と②を表現する二文の間の「否定」に、譲歩(concession)の意味が含まれているか否かにかかっているとした。

接続副詞on the contraryを含む文章における命題相対化の表現形式は、文脈的要因に応じて①-③が表現される形式の違いにより、分類が可能である。例えば、どの意味構造にも同等の重点を置き、①,②,③をそれぞれ独立文として表現する場合や、①は既に言うまでもない旧情報として、②を示す文に組み込んで表現する場合、否定の意味よりは、対立的な命題の対比に重点が置かれて①と③だけを表現する場合などいろいろである。以下に、表現形式を公式的に提示しておく。

第1形式

①-③が、それぞれ独立した節として、表現される場合

In W_1 it is true that p. In W_2 it isn't true that p. *On the contrary*, in W_2 it is true that NOT p

一旦は、独立文として、 W_1 で命題pが主張される。それが、次の独立文で設定される W_2 において否定される。更に、第三の独立文の中において、 W_2 で命題NOT pが主張される。①-③の全てが独立文として表現されることは、命題相対化を構成する意味構造のそれぞれに一旦は焦点を置いて強調していることになる。また、否定と特殊化の節関係が、暗示によるものではなく、実際に表現された節の間に成立する。図1のモデルに合致する、命題相対化の表現の典型。

第2形式

①が②を表現する文に組み込まれていると考えられる場合。

In W_2 it isn't true that p as in W_1 . *On the contrary*, in W_2 it is true that NOT p.

第1形式とは対照的に、最初から、 W_1 で主張される命題pが、 W_2 の視点における否定の対象として表現される。例えば、Eric is wrong in claiming that p. のような表現は、In the writer's knowledge (W_2) it isn't true that p as in Eric's claim(W_1)という意味構造を前提とすると考え、この形式の第一要素とみなすことができる。①-③をすべて独立した文で表現する第1形式に対して、第二形式は、以前の新聞記事などで既に①に相当する文の情報が与えられているような場合に用いられる形式である。

第3形式

②③だけが表現され、①が見かけ上欠落しているが、様々な方法でその存在が暗示されている場合。

In W_2 it isn't true that p. *On the contrary*, in W_2 it is true that NOT p.

命題pは表現されるが、 W_1 は実際には明示されない。この点で、第二形式とは異なる。 W_1 の明示はないが、public belief等の一般的世界特定要素が暗示される。②が表現されているので、命題pの否定に焦点が置かれているといえる。

第4形式

①と③だけが表現され、②が欠落している場合。

In W_1 it is true that p. *On the contrary*, in W_2 it is true that NOT p.

第1形式と同様に、一旦、独立文で W_1 における命題pが主張される。②が欠落していることは、否定に焦点が置かれているのではなく、①で提示される命題pと③で提示される命題NOT pの対比に焦点が置かれていることを意味する。

第5形式

①と③だけが表現される。しかし、③が、命題not pと命題NOT pの両方で表現されるため、三つの文の関係となる。指標on the contraryは、最後の文につく。

In W_1 it is true that p. In W_2 it is true that not p. *On the contrary*, in W_2 it is true that NOT p.

この形式は、大橋(1999)には含まれていない。前回の分析では、誤って普通の否定文も②を表現するものとして扱ったためである。例えば、He didn't like Exeter.

という文は、It isn't true that he liked Exeter.というように分析してしまった。しかし、これはIt is true that he didn't like Exeter.というように、③を表現する文と見なすべきものである。それゆえ、前回の分析では第1形式と判定したものの中に、この形式として判定し直されたものが有る。第1形式では命題pを否定することに、この形式では命題 not pを主張することに、それぞれ力点が置かれている。

第6形式

③だけが、命題 not pと命題 NOT pの両方で表現される。様々な方法で①②の存在が暗示される。

In W_2 it is true that not p. *On the contrary*, in W_2 it is true that NOT p.

この形式は、第5形式と同様の理由で、前回の分析には含まれていない。前回の分析では第3形式と判定されたものの中に、この形式として判定し直されたものがある。

命題 not pから機械的にpが得られるが、 W_1 は第3形式と同様に明示されない。第3形式では、いろいろな方法で世界 W_1 の存在が暗示され、その世界で主張されたはずの命題pを否定することに力点が有る。しかし、この形式では、②は表現されず、 W_2 での not pの主張に力点がある。その分第3形式より、 W_1 の影がうすい。

7. 指標：contrary to W_1

7.1 第1形式

以下には、上記データ中で最も件数の多いcontrary to W_1 の用いられた文章の分析結果を示す。一部の例外を除き、第5節において表現形式(B)として説明したように、この複合前置詞句は、命題相対化の意味構造③を表現した文に組み込まれていると見なすことができる。そのような場合、意味構造②を示すはずのIn W_2 it isn't true that pという構造の文は、この複合前置詞句により③に吸収されたと考えることができる。この複合前置詞句は、①を表現する文に含まれる世界 W_1 をも明示するので、対比される二つの世界が同一文内で表現されることになり、その文だけからでも、命題相対化の各要素を特定することが可能である。 W_1 で主張されている命題pが明示されていなくても、それは、同文内において W_2 で主張されている命題not pを肯定形にするかNOT pから逆算できる。一般的に、この複合前置詞句を含む文は、意味構造①-③の全てを一文内に集約して表現したものとみなしてよい。

しかし、例文1の説明でも示したように、先行文により、既に①が表現されていることもあり、その場合には、その先行文から直接に命題pを得ることができる。

また、この先行文は、③を表現する文との距離がかなり文章中で離れていても、二つの文の間には共通の世界特定要素 W_1 があるため結束性が生まれる。その結束性は、contrary to W_1 の W_1 を表現する名詞句に、①の世界特定要素と共通の語句や、the、that などの前方照応的表現が含まれており、先行文で既に表現された W_1 を指示することによる。この場合の表現形式は、前記(B)のように In W_1 it is true that p. *Contrary to W_1 , in W_2 it is true that NOT p.* と表すことができる。この形式の特徴は、①をまず独立した文で表現することにより、一旦は W_1 の立場に視点を置いて p を主張し、それから、次の文でそれに対する W_2 に視点を移動させる効果をもつ点である。便宜上この形式を第一形式とする。

ただ、上記データの示す限りでは、先行文脈で①に対応する文が独立文として表現される場合はむしろ希であり（115件中3件）、比較作業の①-③の全てが一文中で表現されているとみなし得る場合が大多数である。第一形式では、独立文として、一旦は W_1 の立場に視点が置かれ p の主張がなされたのに対して、大多数の場合は、①も③を表現する文から得ることになるため、 W_1 は W_2 の視点に相対的に語られるのみで、 W_2 の視点とは独立した文で W_1 の視点を設定し p を主張するということがない。その意味で、 W_1 は W_2 に従属的である。

7.2 第2形式

以下にまず、意味構造①-③の全てが一文中に集約されているとみなし得る表現形式の例を示す。それにも、いかにして①②が得られるかによって、いくつかのパターンをみいだすことができる。その一つは、 W_1 で主張する命題 p を以下の例のように明示するものである。（該当する部分は太字で示す。）

例文2

May I cite just two of many examples where Mr Behr misrepresents the evidence? **Contrary to his claim that Hirohito gave the military a 'free hand in China'**, the diary of Harada Kumano, a key court official, shows that Hirohito repeatedly called for a diplomatic settlement of the Sino-Japanese war.

（同格の that 節の使用による p の明示 $W_1 =$ Mr Behr's claim $p =$ Hirohito gave the military a 'free hand' in China）

例文3

A few years ago I took part in BBC radio discussion on student loans. Every bank manager in the audience, **contrary to the expectations of the BBC producer**

who had seated them on the 'in favour' side of the audience, strongly opposed loans, each able to supply horror stories of earnest graduates on their books struggling to pay off loans.

(W_1 = the expectations of the BBC producer p = the bank managers were in favour of student loans)

例文4

Isolated in their corner, outlawed and excluded from the plebiscite, are the Communists, a considerable force in the shanty towns. For the moment, the 16 opposition parties are keeping the Communist at a very safe distance. **Contrary to the government's hysterical warnings of insurrectionary plots**, the Communists have so far echoed the No campaign's call for restraint.

(W_1 = the government's hysterical warnings p = the Communists are plotting an insurrection)

以上、例文2-4で示した形式を便宜上第2形式とする。また、例文2の構造をその代表的なものとして、*Contrary to W_1 that p , in W_2 it is true that NOT p .*と表す。

7.3 第3形式

第2形式では、同格のthat節など様々な手段でpが明示されるが、それは、単にNOT p の否定形として得られる命題ではなく、より特定された情報であった。この点で、次に示すpが明示されない形式とは異なる。pが明示されない場合は、文中のNOT p からの逆算でnot (NOT p)として得られる情報以上には、その特定ができない。以下にその例を示す。

例文5

Contrary to all the visible evidence, Number 4 Burlington Lodge, situated near London's Putney Bridge, was once a Victorian women's prison. The studio house has an enormous lounge, 33ft by 30ft, with ceilings that are 12ft high.

(W_1 = all the visible evidence p = it wasn't once a Victorian women's prison)

例文6

The Green Papers published by Lord Mackay of Clashfern, the Lord Chancellor, three weeks ago had missed an important opportunity. The

government proposals would, **contrary to their stated aim**, 'reduce consumer choice, lower the quality of legal services, and diminish competition'.

(W_1 = their stated aim p = the proposals don't reduce consumer choice, lower the quality of legal services, and diminish competition)

例文7

There's mud in marina-land, **contrary to what the developers may say**. The river estuaries around Portsmouth and Southampton form the heart of yottie country, the home of Howard's Way, of floating pontoons, plastic boats and deck wellies.

(W_1 = what the developers may say p = there isn't mud in marina-land)

この形式を、*Contrary to W_1 , in W_2 it is true that NOT p* .と表し、第3形式とする。この形式では、NOT p を否定することにより得られる命題not (NOT p)が、 W_1 で主張される命題として算出されるのであるが、その命題は、第2形式の命題 p と比べれば、命題NOT p に対する反対の意味の特定が弱い。この事実は、例えば例文2の文を下のように第3形式で表現したときに失われる具体性によって示すことができる。

Contry to his (Mr Beh's) claim, the diary of Harada Kumano, a key court official, shows that Hirohito repeatedly called for a diplomatic settlement of the Sino-Japanese war.

つまり、この文から得られる命題not (NOT p)は、[Hirohito didn't repeatedly call for a diplomatic settlement of the Sino-Japanese war] であるが、これは例文2の命題 p [Hirohito gave the military a 'free hand in China'] を必ずしも意味しない。反対対当(contrary)という語を使ってみても、日常言語においてのその意味は広く、ある命題と反対対当の関係にある命題が実際に明示されるのでなければ、対比されている命題は曖昧なままである。

7.4 第4形式

第3形式と同様に、命題 p を直接に明示していないが、その否定形not p を W_2 で主張することにより、結局命題 p も自明になるのが次の第四形式である。この形式は、*Contrary to W_1 , in W_2 it is true that not p* . と表せるものである。ここまでの

形式では、命題相対化に含まれる比較作業③が、In W_2 it is true that NOT p. というように表現されるものを検討してきた。NOT pは、命題pの否定形not pが意味的に特定されて表現された命題であった。第4形式ではそこまでの特定が同一文中ではなされてはおらず、pの反対命題が否定形として表現されているだけである。以下に例を示す。

例文8

The lack of progress with economic reform in the East ought to add to the pressures on the Soviet defense budget. **Contrary to what might have been expected**, the Gorbachev years have **not** as yet been lean ones for the Soviet military, but with the economy as stagnant as ever the military budget will now have to be cut back if the burden is not to become even more severe.

(W_1 = what might have been expected p = Gorbachev years have been lean ones for the Soviet military)

例文9

Contrary to popular Western belief, mergers and acquisitions are not quite unknown in Japan. None the less, Japanese companies are still cautious about certain types of deal.

(W_1 = popular Western belief p = mergers and acquisitions are unknown in Japan)

例文10

The Grant-Maintained Schools Trust has **not** received any government funding, **contrary to the impression given in an article on the Education page last Thursday**. Any funding which may be provided by the Government, under regulations at present before Parliament, would be 'for the provision of education services' after a school has approval from the Secret of State to opt out.

(W_1 = the impression given in an article on the Education page last Thursday p = The Grant-Maintained Schools Trust has received some government funding)

この形式では、 W_2 において真と主張されている命題を否定形not pで表している。この特徴故に、pの特定は容易であるが、not pという命題自体の具体性が、第3形式のNOT p程には高くない。これは、例えば、命題 [Tom is rich] に対して、その

否定形の[Tom isn't rich]という命題が、[Tom is poor]という命題ほどには、「反対」の意味を特定しないということと同様である。それでも、richとpoorのような語彙の意味的な特徴による反対関係が明らかである語を一部に持つような命題であれば、その否定形もかなりの情報価値を持ち得る。しかし、否定形で表現された命題の意味は、第3形式で命題pの意味がnot (NOT p)以上に特定できなかつたのと同様、曖昧さを残す場合が多い。

7.5 第5形式

上記のように、第4形式 *Contrary to W_1 , in W_2 it is true that not p.* は、not p という命題が具体性に欠け、曖昧さを残す場合が多いので、しばしば、not pを意味的に特定するための情報によって補足される。その結果、文章は、*Contrary to W_1 , in W_2 it is true that not p. In W_2 it is true that NOT p.*と表すことのできる二つの文、または節からなる形式を取る。これを第5形式とし、以下にその例を示す。

例文11

Contrary to the assumptions of those who now demand it, school uniform was not originally conceived as formal wear. Flannels, blazers and caps, gym tunics, blouses and berets were sporting dress in Edwardian England.
(W_1 = the assumptions of those who now demand school uniform p = school uniform was formal wear NOT p = it was sporting dress)

第2文の flannels, blazers and caps, gym tunics, blouses and berets は、school uniform の具体例であると考えれば、NOT p を上記のように捉えることができる。この例では、school uniform was not formal wear という曖昧な否定形の命題が、school uniform was sporting dress という命題で特定されたといえるのである。

例文12

Contrary to some popular opinions, the Tokyo stock market does not move entirely in a world of its own but is capable, like every other market, of responding to news from the outside. Some of the responses are more predictable than others.

(W_1 = some popular opinions p = the Tokyo stock market moves entirely in a world of its own NOT p = it is capable of responding to news from the outside)

この例では、NOT p による意味の特定が、not x but y という構造による情報の

置換によって実現されている。

例文13

In his keynote speech at the meeting, Mr Berecz conceded that the mood of the public was deteriorating and that confidence in the party and government was at a low point. The effect of the personnel changes of the May party conference had been over-estimated by the membership, he said, giving rise to the present dissatisfaction.

Contrary to expectations, Mr Berecz paid very little attention to independent groups which are emerging on the political scene, concentrating his fire instead on the media and his enemies within the party. 'Our political life is irritated and the mood of the public spoilt by certain distortions in the media,' he said.

(W_1 = expectations p = Mr Berecz paid attention to independent groups which are emerging on the political scene NOT p = he paid attention to <concentrated his fire on> the media and his enemies within the party)

ここでは、littleという否定語をnotと同等に捉えて、この形式の一例とした。また、insteadという語が情報の置換が行なわれていることを示す指標の役割を果たしている。

7.6 第6形式

ここまでに検討してきた形式は、意味構造①が独立文として表現されている第1形式は例外として、①②に対応する文が、③を表現する文に融合したと考え得る形式であった。しかし、contrary to W_1 という複合前置詞句が、②を表現していると考えられる文に組み込まれる例外的な場合もある。つまり、Contrary to W_1 , in W_2 it isn't true that p .という意味構造の文が表現される。第4形式のContrary to W_1 , in W_2 it is true that not p .が、「 W_2 でnot p を主張する」のに対して、この場合は、「 W_2 で p を主張しない」ということであり、厳密には、 W_2 と p の関係を否定することを主眼としているといえる。しかし一般的には、この意味構造を持つ文は、解釈過程でその意味を強化され、第四形式と同様に理解され得る。それでも、第4、5形式と同様に、命題not p が意味的に曖昧であり、更なる意味の特定を要求する。結局、このような場合には、次のような表現形式となる。

Contrary to W_1 , in W_2 it isn't true that p . In W_2 it is true that NOT p . これを第6形式として、以下にその例を示す。

例文14

Contrary to what M. H. Sinnatt (letter, 9 February) suggests, it is not the case that only responsible dog owners would pay and irresponsible ones would not. If registration were made compulsory at the time of acquiring a dog or puppy, everyone would have to pay. This would be the only way of ensuring a complete record.

(W_1 = what M. H. Sinnatt suggests p = only responsible dog owners would pay and irresponsible ones would not NOT p = everyone would pay)

第一文の、it is not the case that p という構造は、意味構造②を直接表現する形式とみなすことができる。これは、it is the case (true) that not p という③に対応する文として、意味を強化した解釈もできるが、それでもまだ否定文での意味の提示は曖昧であり、その特定が要求される。この例では、その特定が、命題 NOT p [everyone would have to pay]によってなされている。

7.7 第7形式

更に次の形式も、第6形式と同様に複合前置詞句 *contrary to* が意味構造②を表現する文に組み込まれていると見なし得る。しかし、*Contrary to W_1 that p , in W_2 it isn't true that p* という形式により、 W_1 の後に *that* 節を用いるなどして、命題 p を明示している点で異なる。このように形式を示すと、 p の繰り返しにより、一方が一見余剰な情報のように思える。実際には、同一の命題が繰り返し表現されるのではなく、命題 p は、表現された二つの異なる節から共通の命題として推論されるものである。この形式を *Contrary to W_1 that p in W_2 it isn't true that p . In W_2 it is true that NOT p .* と表し第7形式とする。以下にその例を示す。

例文15

Dear Sir

Surely the whole point of Alex is his insatiable desire to publicize in every way his wealth. **Contrary to your correspondents' thought** (30 September), that he should have timed his wedding to coincide with the start of the financial year, I cannot imagine he would wish to take advantage of tax concessions. Quite the opposite. His choice of date, in my opinion, is deliberate. Sucks to Megabnank.

(W_1 = your correspondents' thought p = Alex wishes to take advantage of tax

concession by timing his wedding to coincide with the start of the financial year
 NOT p = He deliberately chooses not to take advantage of tax concession by doing so)

ここでは、I cannot imagine p という表現を、In W_2 it isn't true that p に対応するものとする。imagine に続く命題 p は、[he wishes to take advantage of tax concession] であるが、 W_1 に続く命題は [he should have timed his wedding to coincide with the start of the financial year] であり、前者と同一ではない。しかし、二つの命題の間には目的と手段の意味関係があり、 W_1 に続く命題として手段を述べることで、実はその目的を表す命題をも暗示していることが推論される。つまり、命題 p の内容は、上記の () 内に示したような形で、目的と手段の両方を含んでいると推論される。この推論により初めて、contrary という語で明示された反対関係が整合性を持つのである。そして、In W_2 it is true that NOT p という意味構造③に対応する *His choice of date, in my opinion, is deliberate.* という文が、反対関係の意味を特定するために補われている。Quite the opposite という直前の表現は、この文を NOT p として理解すべきことを明示している。

7.8 表現形式の分別基準

以上、複合前置詞句 contrary to W_1 を命題相対化の指標とみなし、それを含む文章がどのような形式で、命題相対化を表現するのかということを見てきた。以下に、七つの表現形式を特定することになった基準を再確認し、それぞれの表現形式の関係をまとめてみる。

七つの表現形式は、命題相対化を構成する意味構造①②③が、それぞれ独立した文として文章中に表現されているか否かという基準で見ると、次の三つのタイプに分類することができる。第一に、①は独立文として表現されるが、②は③を表現する文に従属したとみられるタイプがある。これには、例文1で示した第1形式が含まれる。第二に、①②は独立文としては表現されず、共に③を表現する文に吸収されたとみられるタイプがある。これには、第2形式から第5形式のそれぞれが含まれる。第三に、①が②を表現する文に吸収され、③は独立文として表現されるタイプがある。これには、第六形式と第七形式が含まれる。

上記第二のタイプは、複合前置詞句 contrary to W_1 の直後に同格の that 節を伴うなどして、命題 p が明示されるか否かという基準と、③の命題要素が p の否定形 not p として表現されるか、或いは、それがより特定された NOT p として表現されるかという基準で、細分化される。命題 p が明示され、③の命題要素が NOT p と

して表現されたものが、第2形式である。命題pは明示されず、③の命題要素がNOT pとして表現されたものが第3形式である。命題pは明示されず、③の命題要素がnot pとして表現されたものが第4形式である。命題pは明示されず、③の命題要素がnot pとして表現され、その上、意味を特定するNOT pを表現する文が直後に続くのが第5形式である。

上記第三タイプの細分化は、第二タイプの場合と同様、複合前置詞句 *contrary to* W_1 の直後に同格の *that* 節を伴うなどして命題pが明示されるかどうかという基準による。命題pが明示されないのが第6形式、明示されるのが第7形式である。どちらの形式も、②を表現する文の後に、命題要素NOT pを含む③を表現した文が続く。

ここに論じた七つの表現形式以外にも、様々な形式が予想される。例えば、意味構造①,②,③の全てが独立文として表現されるような形式が有り得ないとは言えない。しかし、少なくとも今回用いたデータの中では、そのような文章を見つけることができなかった。このことは、接続副詞 *on the contrary* を指標として集めた文章の中においては、①,②,③全てが独立文として表現される場合がかなり多く見られたのとは対照的である。①が独立文として表現される第1形式の件数も非常に少なかった。また、②が表現されていると考えられる第6、第7形式も非常に件数が少なく、例外といって良いほどであった。このことから、*Contrary to* W_1 という複合前置詞句は、一般的に、意味構造③を表現する文に文法的に組み込まれ、意味構造①,②はその文から逆算して得られるといえる。換言すれば、命題相対化の意味構造③の主張、つまり「 W_2 ではnot p / NOT pが真である」ことを主張するのに重点がおかれ、意味構造①,②はそれに従属的なものとして表現されるのである。

8. 意味機能

命題相対化については、表現形式のみならず、その表現全体が持つ意味機能についても考察する必要がある。様々な形式で表現される命題の相対化は、二つの世界の比較作業であるが、その比較作業が意味するものは何であろうか。ここでいう意味機能とは、命題相対化の表現全体が、例えば誤りの訂正という目的を果たしているような場合に、その目的のことをいい、それを「誤り(mistake)－訂正(correction)」というように表す。この表記の仕方では意図していることは、文章の一部を成すいくつかの文が「誤り」を表現し、他の一部を成すいくつかの文が「訂正」を表現することにより、その二つの部分には意味的な繋がりが生まれていることを示すことである。

第6節でも述べたが、ここでいう意味機能は、命題相対化を表現している各文の

間にある意味関係のネットワークの中に位置づけることができる。二つの節どうし、或いは文どうしの間に結ばれた意味関係が、もう一つの同様に結ばれた意味関係と統合され、更に大きな意味関係を成立させるといったように、二節間の意味関係を最小単位とするネットワークとして命題相対化の表現を捉えると、その意味機能とは、ネットワークの頂点に位置する意味関係である。例えば、命題相対化の意味構造①-③がすべて独立文で表現されるときには、第一文と第二文の間には「否定」の関係が成立し、第二文と第三文の間には「特殊化」の意味関係が成立する。そして、三文全体としては、否定と特殊化の統合した意味関係として、「誤り-訂正」や「予測(expectation)-挫折(frustration)」の意味関係が成立し、これを命題相対化の意味機能と呼ぶのである。文や節の関係をこのように捉えることは、文や節の境界を越えて文章構造を記述しようとする際にとり得る一つの方策であり、二節間の意味関係をその基準とする立場である。

実際に、on the contraryを指標として集めた文章の中では、この方策により意味構造①-③を表現する文の関係を特定することが、その文章の構造の大きな部分を説明することになった。特に①-③がすべて独立文で表現されるときなどには、命題相対化の意味機能それ自体が文章全体の目的と言って良い場合も多かった。例えば、ある誤った情報の訂正を目的として書かれた文章の中では、大多数の文が①、②、③を表現するそれぞれの文との関係で捉えられ、命題相対化の意味機能そのものが文章全体のそれと言えりような場合も多い。

それに対して、contrary to W_1 という指標を含む文章では、それを含む一文だけで命題相対化が表現されてしまうので、命題相対化は、文章全体の大きな部分には関わらないことが多い。contrary to W_1 という表現は、命題相対化の意味機能を文章中の一文内に押し込めてしまい、独立した文どうしの関係としてそれが表現される場合は希である。命題相対化が文章の比較的小さい部分にしか関わらないという特徴は、この表現が、Contrary to expectations/ common belief/ the prevailing ethos/ the apparent belief/ popular opinion, in W_2 it is true NOT p.といった形式で段落の始めに現れ、一般常識の中で捉えられる命題pと対比することにより命題NOT pの目新しさを強調するような、話題提示の文の中で用いられることが多いことにも伺える。文章全体の構造という点では、この一文内に押し込められている「誤り-訂正」や、「予測-挫折」という意味機能は、あまり重要性を持たない場合が多い。

しかし、意味機能が必ずしも節関係としては捉えられないということは、その特定が不可能であるということではない。むしろ、contrary to W_1 という表現は、世界特定要素を明示するので、それを含む文から対比される世界の組み合わせを極め

て容易に取り出すことができる。そしてここでも、on the contraryを含む文章の分析の場合と同様に、「誤り－訂正」と判断できる場合が大半で、「予測－挫折」と判断できるものが少数あった。例えば、例文1(6)は、前者の例と見なせるし、例文8のContrary toで始まる文は、後者の例と見なすことができる。対比されている世界特定要素は、例文1の場合、 W_1 (the impression given in the advertisement)と W_2 (share)であり、広告の与える印象と、動詞の時制によって規定される現実世界の対比と考えられる。例文8では、 W_1 (what might have been expected)と W_2 (have been)の世界特定要素が、予測と現実の対比を表している。ただ、どちらの意味機能とも取れるような場合や、どちらとも取れないような場合も多く、対比される二つの世界特定要素と意味機能の関係は、より深い考察を要する。以下では、この点についてのべる。

9. 意味機能特定の問題点

命題相対化の意味機能を特定する一つの基準として、文章中にそれを明示するような指標が含まれていることがあげられる。接続副詞on the contraryを含む文章を分析したときに、mistake, correct, expectなどの語が、意味機能を明示している場合が多かった。複合前置詞句contrary to W_1 の分析においても同様で、実際に、例文1にも、「誤り－訂正」を示すmisleading, correctという語が含まれているし、例文8にも、「予測－挫折」を示すexpectという語が、世界特定要素の中に含まれている。どちらの意味機能も第一要素と第二要素が、否定の関係を持つという共通点があるにもかかわらず、この二つの意味機能を区別したのは、「予測－挫折」が、文章中で「問題」を提示することになる場合が多く、それに対する「解決」を要求し、それを表現する文との間に「問題(problem)－解決(solution)」というより高次の意味関係を成立させる可能性が高いためである。さらに、両者を区別する理由として、「予測－挫折」には、譲歩(concession)の意味が含まれていることも指摘した。²⁾

しかし、前節でも最後に触れたように、その意味機能の判別はそれほど明確ではない。例えば、例文13にはContrary to expectationsという表現が含まれているのであるが、予測された命題p[Mr Berecz paid attention to independent groups which are emerging on the political scene]が「誤り」であり、事実として提示された命題not p [he paid little attention to independent groups which are emerging on the political scene]により「訂正」されたのだと考えることに何の不自然さも感じられない。そして、予測が外れたことが、「問題」として文中に提示されている訳でもない。つまり、この場合の命題相対化の意味機能は、expectationsという単語はあるが、「誤り－訂正」としてもかまわないように思える。

この場合の世界特定要素(expectations)は、例文1の W_1 (the impression given in the advertisement)などと同様、その世界で主張される命題を否定したとしても、挫折(frustration)とは理解しにくいのである。「予測－挫折」と判断し得るような場合は、ただ expectations という指標を含んでいるということだけでは十分ではなく、世界特定要素 W_1 が、かなり信憑性の高いものでなければならないと思われる。この例においては、世界特定要素である expectations が、popular belief, general opinion などの世界特定要素で表される世界と同様に、書き手が自分自身の信じる世界として提示したものとは見なされにくい。世界特定要素 W_1 で表現される世界に、書き手がどれだけの信憑性を見出して表現しているかという、必ずしも特定の容易ではない基準が、意味機能の特定には関わっているのである。

W_1 の信憑性という点では、それがかなり高いと考えられる法律・規則などが、世界特定要素として表現される場合もある。以下に一例を示す。

例文16

Mr Beauthier questioned the evidence of Italian witnesses, alleging they had been pressurized into identifying people from photographs presented to them 18 months after the tragedy. He, and other lawyers, also complained that the 48,000-page prosecution dossier had not been made freely available to the defendants, contrary to the European Convention of Human Rights.

この例に示すような世界特定要素は、expectation より信憑性という点では高く、この場合の命題相対化の意味機能に対しては、「予測－挫折」という表記はあまり適切ではない。もちろん、「誤り－訂正」という表記が不適切であることは言うまでもなからう。命題相対化の意味機能は、このように様々な要因に影響されて変化するものであり、簡単に判断できない場合も多い。

以上の問題点を踏まえて、以下では対比される世界特定要素と、意味機能の関係の体系的な説明を試みる。

10. 対立世界と意味機能の関係

10.1 順接と逆接

前節で、文章の書き手が、世界特定要素によって表現される世界にどの程度の信憑性を置いているかが、意味機能を決定するうえで重要な要因であることを述べた。しかし、この信憑性とは、いったいどのようなものであろうか。また、expectation という語が世界特定要素として用いられても、場合によっては、その

否定が挫折(frustration)とは捉えられないということに、一貫した説明が可能であろうか。

前述のように、contrary to W_1 という表現を含む文では、命題相対化の意味機能は一文内に集約されていて、節関係としては表現されないことが多い。しかし、この文が先行文脈を持つ場合に、その先行文脈とこの文との関係に注目すると、興味深いことに気がつく。以下に示すように、contrary to W_1 という表現を含む文は、先行文脈と順接の論理関係を持つ場合と逆接の論理関係を持つ場合の両方あることが分かる。

例文17

When other Romance words are counted as well, the original native English element in our language becomes a minority: indeed it could be said, contrary to popular belief, that English, in terms of vocabulary, is more Romance-based than Anglo-Saxon-based.

例文18

Meat sales are traditionally weaker in the first half, and the sector has seen hefty price rises. However, contrary to analysts' summer expectations, Sims has not cut its projected sales forecast. Mark Lynch at BZW expects full year profits of £ 7.3m.

例文17では、副詞*indeed*が、それを含む文とそれに先行する文とが論理的に順接の関係であることを示している。一方、例文18では、接続詞*However*が、先行する文との逆接の関係を示している。これは、contrary to W_1 という表現で特定される世界 W_1 が、先行文脈と論理的整合性を持つ世界である場合と、そうではない場合があることを意味する。 W_1 が、先行文脈と論理的整合性を持つ世界であるならば、逆接の接続詞*however*が付加され得るし、そうでない場合、つまり、 W_1 が先行文脈と論理的整合性を欠く世界であるならば、先行文脈は W_2 と論理的整合性を持つことになり、副詞*indeed*を付加し得る。上記例文で言えば、例文18の W_1 (analysts' summer expectations)は、先行文と整合性を持つのであり、例文17の W_1 (popular belief)は、先行文脈と整合性がない。換言すれば、*analysts' summer expectations*は、前文で述べられている伝統的な肉の販売に関する傾向から論理的に導き出される。それに対して、*popular belief*は、その前文の内容 [the original native English element in our language becomes a minority] とは論理的に整合し

ない。この文の内容は、 W_2 (it could be said)の内容 [English, in terms of vocabulary, is more Romance-based than Anglo-Saxon-based] と論理的に整合するのである。

先行する文脈が、ある世界と論理的に整合するという事は、その文脈がその世界を規定しているとも考えられ、その意味で、世界特定要素の延長であるといえる。仮に、そのような先行文脈をも世界特定要素と同様に表記した場合、順接と逆接の論理関係は以下のように図示できよう。

図3

先行文脈	命題相対化の表現	整合性
W_2	Contrary to W_1 , in W_2 it is true that NOT p	順接 (indeed)
W_1	Contrary to W_1 , in W_2 it is true that NOT p	逆接 (however)

ここでいう順接とは、NOT pを論理的に導き得る世界 W_2 が先行文脈として設定されていながら、contrary to W_1 という表現を用いて、それとは論理的に整合しない世界 W_1 を提示するが、文全体としては先行文脈と整合する W_2 でNOT pを主張するという展開である。この場合、 W_1 の存在が示されるものの、最終的には命題相対化を表す文と先行文脈の間には、 W_2 の視点が一貫していることになる。これに対して、逆接の方は、先行文脈と命題相対化の表現の間に世界の統一が見られない。先行文脈では W_1 が設定されているにも関わらず、最終的には W_2 の視点が設定されてしまうからである。

ここまでは、順接と逆接という論理関係を、命題相対化の表現と先行文脈の関係として説明してきたが、この先行文脈の働きを、文章の書き手の経験知識に置き換えて考えることも可能である。すると、図3は、書き手がある世界を理解するために、それをみずからの経験知識と比較する手順をも表していることに気がつく。書き手は、ある世界に直面し、それを理解しようとするときに、経験知識と論理的に整合する世界を設定して、両者を比較するのである。その比較作業の手順は、二つの世界の順序付けにより、二通りに表現される。一つは、理解の対象となる世界(対象世界)に対して、経験知識と整合し比較の基準ともいえる世界(基準世界)を提示する順接である。もう一つは、逆に、基準世界に対して、対象世界を提示する逆接である。つまり、順接の場合は、対象世界が W_1 、基準世界が W_2 であり、逆接の場合は、対象世界が W_2 、基準世界が W_1 ということになる。Contrary to W_1 という表現の中で、同じ W_1 であっても、対象世界の場合と、基準世界の場合がある。

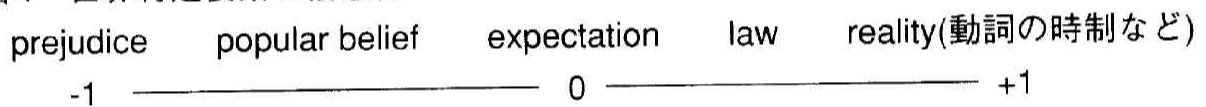
「誤り-訂正」という意味機能は、対象世界に対して基準世界を提示する順接で

表現され、「予測－挫折」は、基準世界に対して対象世界を提示する逆接で表現される。「挫折」の意味は、この逆接の論理関係によると考えられる。

10.2 世界特定要素の信憑性

基準世界は、経験知識により推論される命題 p を真とする世界である。そのような世界を表現する世界特定要素はいろいろある。しかし、それぞれの世界特定要素は、その表現する世界が経験知識と整合する可能性において異なる。前節冒頭で述べた信憑性とは、各世界特定要素に固有の、経験知識との整合性の程度である。従って、信憑性の高いものほど、基準世界を表す世界特定要素としての働きが強く予測される。本稿で用いたデータを基に、以下に示すような信憑性を表すスケール上に、代表的な世界特定要素を並べてみる。

図4 世界特定要素の信憑性



この信憑性のスケールは以下のことを示している。プラス側に位置する世界特定要素は、信憑性が高く、経験知識と整合し易い、つまり、基準となる世界を表現する可能性が高いが、マイナス側に位置するものは、経験知識とは不整合で、基準世界としては表現されないことを表している。経験知識により推論された命題 p をプラス側の世界で主張し、命題 not p はマイナス側の対象となる世界で主張すれば、スケールの一貫性は保たれる。しかし、命題 not p もプラス側の対象となる世界で主張してしまうと、矛盾が生じ、スケールの一貫性を乱してしまうことになる。

「予測－挫折」の意味機能が「問題」の提示になることが多いことを述べた。この意味機能は、予測(expectation)を基準世界、つまり、経験知識と整合するプラス側の世界として提示して、その中で命題 p を主張するが、not p もプラス側の現実世界(reality)で主張するために矛盾が生じ、信憑性の体系を崩してしまうのである。これが、「問題」となる。

しかし、世界特定要素 expectation は、スケール上微妙な位置にある。例文 18 のように、その先行文脈で、経験知識との整合性が示されている場合には、「予測－挫折」の意味機能を成立させるが、例文 13 で見たように、単独で世界を規定する場合には、マイナス側の世界と判断される場合も有り、その場合は、基準世界とはならず「挫折」を導かないのである。世界特定要素 expectation をスケール上でゼ

口に位置づけてあるのはその為である。なお、expectationが、先行文脈で、基準世界としての整合性を強調されている場合には、その先行文脈と逆接の関係を示す、but, however, yetなどの接続詞が文に含まれることが多い。

一方、例文16の *the European Convention of Human Rights* のように、基準世界が expectation などより信憑性が高い世界特定要素で表現されると、「規則(rule)－違反 (breach)」とでも記すべき意味機能を持つようになり、「予測－挫折」という表記がやはり不適切になってしまう。スケール上の law は、このような世界特定要素の典型である。

「誤り－訂正」の意味機能は、 W_1 (popular belief, popular suspicion, appearances, general opinion, his claim などにより規定される仮定的世界) に対して、 W_2 (is, were, do, did, have been などの時制により規定される現実世界) を提示する場合に成立する。即ち、命題 p を主張する対象世界 W_1 は、マイナス側に位置し、not p を主張する基準世界 W_2 は、プラス側に位置する。それゆえに、信憑性のスケールは一貫性を保持している。また、 W_1 に良く含まれている popular, general, common, prevailing などの形容詞は、信憑性を下げる役割を果たしていると思われる。popular belief ではなく、belief だけならば、単独の expectation と同様、書き手の経験知識と整合する基準世界と見られる可能性も出てくるので、これらの語でマイナス側の世界特定要素であることが強調されていると考える。

「誤り－訂正」の意味機能は、仮に、基準世界(W_2)の信憑性が低くなれば、それとは捉えにくくなる。以下にその例を示す(下線は W_2 の世界特定要素)。

例文19

I have the impression, and it's only an impression, that Mrs Thatcher, contrary to what people suppose, is very sparing in her appearances on television.

この様に、書き手の経験知識と整合する基準世界が、限りなくマイナスに近づいていることを強調すると、二つの世界の信憑性には大差がなくなり、「訂正」の意味が薄らぐ。つまり、「誤り－訂正」の意味機能も、「予測－挫折」の意味機能と同様に、基準世界の信憑性によって、その判定の適切さが変化する。

命題相対化の意味機能は、書き手の経験知識と整合する基準世界と、理解の対象となる対象世界との比較作業から生まれてくる。二つの世界は、複合前置詞句 *contrary to* W_1 によて順序付けられる。 W_1 でどちらの世界を表現するかにより、「対象世界に対する基準世界」という順接か、「基準世界に対する対象世界」という逆接の論理関係で表現されるのである。基準世界は、信憑性がプラス側の世界特定

要素により表現されるが、対象世界がマイナス側の世界特定要素で表現されれば、信憑性スケールの一貫性が保たれる。しかし、対象世界もプラス側の世界特定要素で表現されると、信憑性スケールには矛盾が生じてしまい、「問題」が生じる。

「誤り(mistake)－訂正(correction)」と「予測(expectation)－挫折(frustration)」の意味機能は、比較される二つの世界の論理関係と信憑性を特定することで定義が可能であるが、特別な意味機能というわけではない。しかし、ここで述べた意味機能生成の過程で、好対照を成す二つの意味機能であるといえる。前者は、順接の論理関係で表現され、マイナス側の対象世界で命題pを主張するのに対して、プラス側の基準世界で命題not pを主張する。その結果、信憑性スケールの一貫性は保たれる。後者は、逆接の論理関係で表現され、プラス側の基準世界で命題pを主張するのに対して、更にプラス側の対象世界で命題not pを主張する。その結果、信憑性スケールに矛盾が生じる。

11. 世界特定要素の抽出

最後に、今回用いたデータから世界特定要素を抽出して以下に示し、ここまでに論じてきたことの補足としたい。なお、全く同形式のものは一つだけ例を示した。

contrary to W ₁	W ₂
1) that view should	If ... doesn't (逆接)
2) the researchers' own analysis	they found that
3) the impression given in the advertisement	share
4) the popular belief that p	are
5) the government's hysterical warnings of insurrectionary plots	have so far echoed
6) the expectations of the BBC producer	opposed
7) reports that	has yet been fixed
8) your correspondents' thought that	I cannot imagine
9) his claim that p	the diary of Harada shows that
10) Kenneth Clarke's churlish comment that	would
11) the usual experience of	are
12) expectation	enjoyed (however 逆接)
13) what the researchers had expected	believes (however 逆接)
14) analysts' summer expectations	has not cut (however 逆接)
15) prevailing philosophy	are not

命題相対化の表現形式と意味機能

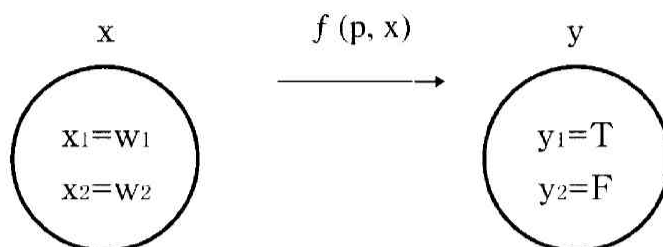
16) what might have been expected	have not as yet been (逆接)
17) the European Convention of Human Rights	hadn't been made (後置) ³⁾
18) what the commission may think	cannot satisfy
19) the impression given in an article on the Education page last Thursday	has not received (後置)
20) popular Western belief	are not
21) his beliefs	is not
22) what is said in the article's opening paragraph	telephoned
23) some reports in the newspapers	has not come
24) what might be expected	is not
25) popular belief	do not generally reveal
26) contemporary mythology	does not need
27) what many people believe	there was no problem
28) the assumptions of those who now demand it	was not
29) any initial impressions	do not strike (yet 逆接)
30) some popular opinions	does not move
31) popular suspicion	has not
32) views expressed in the US	would not
33) what M.H. Sinnatt suggests	it is not the case that
34) your article	is not
35) popular belief	is not
36) reports	didn't lug
37) Lord Avebury's allegations	am not
38) what its conclusion might suggest	nor is
39) expectations	paid
40) expectations	was not (but 逆接)
41) expectations	are languishing
42) popular belief	is not
43) the impression given by Western newspapers	has not become
44) the assumptions of my French aunt	is (後置)
45) the prevailing ethos	is not

46) your report	is not
47) the apparent belief of some Greek restaurants in England	is not
48) the impression some counties have given when voicing initial misgivings over Dexter's nomination	was not
49) modern popular belief	did not live
50) the impression given in this article	has not received (後置)
51) their stated aim	would reduce
52) what the developers may say	there is (後置)
53) earlier reports	has
54) all the visible evidence	was
55) Ravel's instructions	by singing the scene
56) appearances	has
57) popular opinion	are
58) popular mythology	takes
59) my prejudices	it appears p
60) Brezhnev's hopes	has proved to be
61) the propaganda	has deteriorated
62) popular belief	there is
63) received opinion	have
64) expectations	has been working (逆接)
65) popular staffroom belief	behave
66) existing force practice	were made (後置, 逆接)
67) what people suppose	I have the impression, and it's onlyan impression that
68) recent criticism	have performed
69) reports	have deferred
70) the image projected by the Gorbachev propaganda machine	is worse
71) the benefit figures	suggest (後置)
72) the views expressed in Vincent Hanna's letter (I am delighted that)	I am disappointed that
73) popular belief and the tabloid press	is

74) what the league first stipulated	remains... and will do (後置)
75) most of their expectations	was
76) the caution prevailing in the US and among other major European players	have been swept along
77) prevailing beliefs down at Earls Court	can still be
78) British wishes	if ...approves (逆接)
79) much belief	does
80) popular expectations	did
81) official forecasts	could throw
82) much recent speculation	the survey found that ..appeared
83) most broadcast commentary	it (Record Review) showed that
84) reports by Manuel Barros	is
85) the views of some	actually go out
86) the Government's view	are
87) the views of your solemn Easter Monday leading article	is, I believe, much closer
88) many people's expectations	relented
89) popular belief	were
90) popular prejudice	is
91) common belief	are
92) general opinion	in one respect at least it was
93) the impression given by Del-la-Noy	is (Indeed)
94) popular belief	is (indeed)
95) claims by London businessman Cyril Chapness the tour organiser	denied yesterday
96) the usual programme of self-contained works,	extracts from different pieces
97) section 23 of the Sex Discrimination Act 1975 (Law)	sex discrimination

注

- 1) この命題相対化の図示の仕方は、命題相対化を次に示すような特殊な関数処理と見なすことができることを暗に示している。



- 2) 大橋(1999:328)参照。

- 3) (後置)=contrary to w₁ が文尾についているもの。

参考文献

- Allwood, J., Anderson L.G. and Osten, D.(1977) *Logic in Linguistics*. Cambridge:Cambridge University Press.
- Halliday, M.A.K. and Hassan, R. (1987) *Cohesion in English*. London: Longman.
- Horn, L.R. (1989) *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G.N., and Svartvik, J. (1972) *A Grammar of Contemporary English*.
- Ohashi, S. (1998) "Propositional Relativization in Written Texts." *Kanagawa University Studies in Language* 20. Kanagawa University Institute of Language Studies.
- Winter, E.Q.(1974) "Replacement as a function of repetition: a study of some of its principal features in the clause relations of contemporary English." Unpublished Ph.D. dissertation. University of London.
- Winter, E.Q. (1977) "A clause relational approach to English texts: a study of some predictive lexical items in written discourse." *Instructional Science* 6.1.
- Winter, E.Q.(1982) *Towards a Contextual grammar of English: the Clause and its Place in the Definition of Sentence*. London: George Allen & Unwin.
- 太田朗(1980) 『否定の意味』大修館書店
- 大橋哲(1999) 「文章内の対立的命題」『国際経営論集』(神奈川県大学経営学部) 16,17:309-343.
- 坂原茂(1985) 『日常言語の推論』東京大学出版会

波多野諠余夫(1982) 佐伯伴（編）『推論と理解』東京大学出版会
毛利可信(1980)『英語の語用論』大修館書店